

# 大学入学者の職業的階層判断(格付け)と 専攻学科の志望選択

大 杉 栄 一

(帯広畜産大学教育学職業指導研究室)

College-Students' Rankings on Occupational Status and  
Their Choices of Course of Study

By

Eiichi ŌSUGI

## 1. 緒 言

教育機関において教育の効果を増進するためには、教師の質と量における充実・施設設備の整備・妥当な教育課程が必要であるとともに学生の質の良さが根本的に重要である。教育の面から学生の質を考察すれば、身体的生理的な面・精神的心理的な面・学習経歴・家庭および社会的な面などに大きく分けることができるであろうが、教育機関の目的と性格によってそれぞれの面の必要性も異なりまた必要とする質の水準も異なるであろう。元来義務教育を行なう公立学校では児童生徒の選抜は行なえない。したがって義務教育段階の小・中学校では児童生徒の質はあらゆる面において上下左右の差が甚だしく教育活動は多大のエネルギーを必要とし工夫を必要とする。したがってこれらの学校段階における教育方法や教育技術に関する研究は非常に盛んである。高等学校や大学はなんらかの基準によって生徒や学生を選抜し入学させているので義務教育の小・中学校より生徒や学生の偏差はある面については少なくなっている。したがって教育内容は高度になってはいるが小・中学校より教え易くなっているといえるかもしれない。高等学校や大学における教育の方法や技術に関する研究が義務教育段階のそれに比べて少ないのは、単に高等学校や大学の数やその教師の数が少ないということのみでなく、むしろ教育の方法や技術に関する工夫の必要度が少なかったのであるかもしれない。しかし最近では高等学校段階の教育方法や技術の研究が多くなり、大学についても学生の問題や教育目的・教育方法などについて研究されるようになってきた。高等学校はすでに義務教育終了者の約半数を収容することになっており、高校進学希望者は比率的にはなお増加する傾向にあるのであるから、高等学校における生徒の質の拡散は不可避であり、教育効果の維持向上をはかるにはなんらかの改善工夫がなされなければならない。大学においてもその入学定員は増加の一途をたどり、大学進学希望者は比率的に増勢にある。したがって大学においても学生の質の拡散は不可避である。とするならば大学においても高等教育機関として教育的立場から教育活動

に関する工夫の検討が必要である。

大学において予想される学生の質の拡散は基礎学力である。大学の入学者選抜は健康診断書と高等学校の成績等に関する内申書と大学が実施する学力検査の成績とを資料として行なわれるが、最も重視されるのは学力検査の成績であり、むしろこれだけによって決定されることも少なくないであろう。たしかに大学における高度の学習を開始するためにはある水準の学習成果に到達していなければならないことは明らかである。しかしその要求水準をどの程度に求めるかにはなお教育上の疑点が存在するのではないか。要求水準以上の者であっても上位者が多ければ入学できないし、要求水準以下の者でも上位者が定員に満たなければ大学に入学し得るのが現在の入学試験制度である。極端に言えば学力検査は選抜の順序を決める手段であって質を検定する方法ではなく、質そのものについては高等学校を卒業したことすなわち入学願書を提出する資格を有する者は大学教育を受ける学力水準に到達しているものと見なされているのではないか。六・三・三・四制度と呼ばれる学校段階の制度から考えれば、大学の教育内容は高等学校の教育水準の上に直結すべきものであるから、高等学校で大学が必要とする学科目と単位を修得した者はすべて大学に入学しうる学力水準にあるものと考えてもよいであろう。このような観点から考えれば、学力検査によるのではなくて、入学志望者を抽選で選ぶことも考えられようし、入学志願書の先着順によって決めるという西ドイツの大学のあり方もあながち不合理とはいえないし、まだこれらのほかにいろいろな選抜の方法があり得るであろう。さきに学力検査は選抜の順序を決める手段であると述べたが、一般には学力水準の高い者ほど学生として良い学習成績をあげ得るだろうと考えて、より良い学習成績をあげ得る可能性のある者から順次可能性の少ない者へと定員まで採用し、僅かでも学力水準の高い者を大学としては望んでいるのである。しかし学力水準の高さとはいうものの学力そのものの概念にも不安定さがあり、大学で実施する学力検査の結果がそのまま受験生の学力水準を示すか否かにも疑問がありそれが入学後の学習成績と直結するか否かにもさらに問題がある。大学の学力検査の成績よりも高等学校の成績の方が入学後の学習成績に相関が高い<sup>1)</sup>という報告もあることから考えれば、入学者選抜のための学力検査については十分な検討が必要でありかつての進学適性検査あるいは現在開発試行中の能研テストその他いろいろな工夫が試みられて然るべきであろう。

入学後良い学習成績をあげる可能性は、入学者選抜の基準として妥当である。よい学習成績をあげる可能性は先天的能力と後天的学習到達水準と学習意欲とにかかっている。高等学校で所定の単位を修得して卒業したということは上記の三つの条件を備えているともいえる。もちろん高等学校と大学とでは教育内容に大きな差違があり、大学における学習のためにはより高度の能力を必要とするならば、その能力の検出を入学者選抜の基準とすることも妥当である。大学が入学後の学習について、高等学校におけるある教科についてある一定の学力水準を必要とするならば、出願資格に履習科目と成績についてある条件をつけることも一つの方法で

ある。学習意欲の問題に関しては高等学校も大学も変わらないように見えるが、高等学校の学習目的と大学の学習目的とはおのずから差があり、高等学校の学習内容や学習方法と大学における学習内容や学習方法とにも大きな差があり、高等学校で適応し得たから大学でも適応し得るとは必ずしもいい得られないであろう。大学としては大学の学習に意欲を感じて、それを持続し得る学生を求めべきである。入学時の学力水準が高くとも学習意欲の不足な場合には教育効果の向上は望めないし、時には他の学生の学習の障害となり時には不適応現象を起こして大学を去ることにもなる。しかし学習意欲の有無は入学後の発現であって入学時に学習意欲そのものを検出することは困難である。しかしわれわれは学習意欲を振起しあるいは持続する条件を経験的に知っている。ソーンダイク<sup>2)</sup>は興味を学習の基礎におき、現在の多くの教師は学習指導の導入に興味を利用して学習意欲の振起と持続をはかっている。教科の内容や教師の人となりなどがまた考査成績の向上や他人との競争が学習意欲を振起することもある。経済的収入や社会的昇進の可能性が学習意欲の振起に利用され、またそのように作用していることも事実である。これらの学習意欲振起の条件はほとんど人間の性格や人生観あるいは価値観に関係しており、ほとんど全人に共通するものもあり特殊に個人的なものもある。しかし個人を十分に観察しあるいは調査し検査することによって、その個人がある対象に対して学習意欲をもち得るか否かをある程度推測することは必ずしも不可能ではない。もちろんことは人間の精神作用であり環境は一定でない相対的社会であり、人間の心的活動や社会的事象を攻究する科学の現在の段階では自然科学におけるほどの確実性を求めることは至難であるが、適性の原理や適応の可能性の予想のもとに行なわれている職業指導(現在は進路指導とよばれることが多い)はこの推測を基礎として実施されているのである。もし高等学校の進学指導が前記の条件を考慮して行なわれているならば問題は無いのであるが、往々にして入学試験に合格し得る大学として学力の程度のみを重視して受験生を指導し<sup>3)</sup>、大学もまた前述のように学力検査の成績のみを重視して入学者を選抜しているのが現状であり、しかも大学において相当数の退学者や学業不振者などを出していることも事実である。

以上の点から学力検査の成績のみをもって入学者を選抜することは、高等学校の進学指導が不完全な今日、入学後の学習意欲に関しては必ずしも充分ではないのではないかとと思われるので、学習意欲振起の条件と考えられる興味その他について大学入学者の実態と入学後の学習状況などについて検討しているのであるが、興味に関しては文部省科学研究費の交付を得て目下分析中であり、ここでは職業的階層判断(格付け)に関する検討の一部を中間的に報告することにする。

## 2. 課題の設定

職業的階層判断(格付け)の調査は、学生の入学した学科が妥当であり学習意欲の振起が予想される状態にあるか否かを知って学生の修学の相談指導の資料とするため実施したもので

ある。

大学は専門の学科を修める学問の場であるといわれているが、有能な社会人を育成する場でもある。その社会人は専門の学術に関係した職場に就職するのが大部分であり、専門教育は一種の職業教育でもある。大学へ入学を志望する者はさまざまな動機によるのであるが、いいところに就職できるということもその大学に志望する上に一つの大きな条件となっている<sup>9)</sup>。現在の大学の入学難は進学希望者の増加と有名大学への殺到によってもたらされたものであるが、その背後には現在の社会の学歴重視や有名大学尊重という就職上の問題がからんでいることは一般にいわれていることである。昔のように極端な立身出世とはいえないが、元来人間は社会的に向上を目指し、地位的に上進しようとする。アメリカにおいてもインドネシア<sup>10)</sup>においても、子供たちは親たちの社会的地位よりは上位の職業につくことを望んでいる者が多い。日本においても現在の社会的階層よりは上位の階層に向上しようとする傾向は強い<sup>11)</sup>。しかしいずれの国においてもその希望を達成して上層に向上し得たものは、向上を希望していた者よりも遙かに少ない。現実には野心も希望も突り難いほど厳しいのである。その現実の厳しさを乗り越えて向上し得た人たちの基本的な条件の一つは学歴である。教育程度の向上が社会的地位の向上と結びつき、社会的地位は職業とからみ合っている。大学への入学志望者がより有利な就職条件として大学を考え、より上層の社会人となるために大学へ入学してくるのは当然ともいえよう。すべてはかれらの向上心によるものである。

かれらが就職を意識し卒業後の社会的地位を意識しているとするならば、それは職業分野と強いつながりをもつ学部や学科の選択にも影響するであろう。もちろん学部や学科の選択には職業指導という適性の原理も作用して選択決定されているであろうが、社会的向上心も作用しているであろう。もし社会的向上心が作用しているとするなら、かれらは自らが高いと判断する職種や職業に就職することの可能なあるいは容易な学部や学科を選択するのではないであろうか。さらにかれらが社会的地位において高いと判断する職種や職業に関連する学科に入学したならば、その階層判断が変わらないかぎりその学科における学習意欲は維持され学習効果はほぼ期待できるのではないであろうか。もしかれがこの観点で選んだ学科に入学できず、かれの判断では社会的地位においてかれの選んだ学科に関連する職業よりも社会的に低い地位にある職業に関連する学科に入学せざるを得ないとするならば、かれの学習意欲は維持振興しうるであろうか。いくつかの大学においては入学志望者に志望学科の選択順位を記入させ、学力検査の成績にもとづいて第二志望学科にふり向けて入学させている。本学もその一例である。大学の中には学部の選択順位を記入させているところもある。同一学部の中の諸学科相互の間にはそれほど径程はなく、就職する職種や職業についてそれほど差がないかもしれないが、受験生の判断においてはあるいは差があるかもしれない。もし受験生がある学科に関連した職種を社会的地位において高く評価してその学科を志望していたとするならば、かれをその職種

に関連がなくかれが低く評価している職種に関連する他の学科へ振替えることは、教育的に望ましくないことではないであろうか。以上の観点から職業的階層判断(格付け)の調査資料を、昭和35年度入学者と昭和38年度入学者について分析してみた。昭和35年度はこの調査を実施した最初の年度であり、昭和38年度は最新年度の調査であって昭和35年度と共通の学科とともに相当性格の違った学科が二学科増設されて含まれているので、学科相互を比較するのに多様性が得られてよいと判断したからである。

調査は両年度とも4月中旬に、入学式後2~3日間にこなされた入学者オリエンテーションの時間に、全員に実施されたものである。しかし調査日に欠席したもの、調査項目について“職業に上下は無い”と記入して空欄のまま提出した者がかなりあったので、資料数は入学者数よりも少なくなっている。

#### 調 査 表

職業に上下・尊卑の別はないといわれる。しかし現実の社会では尊卑とはいえないが、階層的な判断をもっているようである。次の職業・身分について貴君の主観的判断で最も高いと思われるものから順次1・2・3~50の順位をつけてみてください(この職種は1952年および1955年の東大社会学研究室の調査項目に、本学卒業生の職業を追加補充したものです)。

大工。市役所課長。農協組合長。小学校教諭。旋盤工。獣医師。商店員。鉄道職員。炭焼夫。家畜診療所長。理髪師。大学教授。農業試験場技師。自作農。土木建築技師。行商人。寺住職。中学校教諭。運搬人。営農指導員。印刷工。警官。農協職員。紡績工。小作農。栄養士。小売店主。機械工業技術者。会社事務員。パン製造工。農業改良普及員。医師。採炭夫。指物師。自動車運転手。列車ボーイ。自動車修理工。高校教諭。漁業者。会社課長。道路工夫。保険勧誘員。新聞記者。くつみがき。裁判官。町工場主。労組委員長。大会社重役。知事。大学生。

職種は尾高氏らの1952年および1955年の調査職種に共通の職種または同一に近いもので表現の異なっているものはいずれか一方の理解の容易な表現に統一し、本学の各学科の卒業生が就職あるいは将来就任することを予想される職種を加え、さらに現在の大学生が自分たちの現在の社会的地位をどのように評価しているかを知るために、大学生の項目を加へ、合せて50項になるように本学学生に関係度の少ないものを削除して決定したものである。

記入法は尾高氏らもトーマス氏らも段階評価によっているが、ここでは直接1~50の順位を記入することにした。これは個人ごとに職種相互の相対的順位を明瞭に見ることができる個人の指導資料としての利用を所期したためである。しかしこの直接順位による記入法は、項目が少数であるときはよいが、このように50項目もありしかも同一階層と思われる職種が多数

包含されている場合には応答の記入時間が長くなり、でたらめも多くなるのではないかと反省される。

### 3. 昭和35年度入学者の資料の分析

資料の整理は志望学科別に行なった。現在の学生の所属学科では第二志望によって編入された者も含まれるので、ある学科と志望者との関係をみるには不純であるので、志望学科別に整理したのであるが、そのためある学科では人数が極端に多くある学科では非常に少数となった。志望学科別に各職種の順位を合計しその平均値を出したのが表1の各学科のスコア欄で

表1 昭和35年度入学者第一志望学科別50職種職業の格付け順位

職種 職業名	学科名人数 項目	獣医学科 23人			酪農学科 60人		栄養士課程 6人		総合農学科 10人	
		順位	スコア	標準偏差	順位	スコア	順位	スコア	順位	スコア
大工	31	32.1	9.5	36	33.8	33	34.0	40.5	36.3	
市役所課長	11	15.0	9.5	6	11.1	7	12.2	6	10.3	
農協組合長	9.5	14.7	9.9	8	12.4	14	14.2	9.5	11.3	
小学校教諭	17	19.6	9.6	16	17.2	13	13.3	17	17.8	
旋盤工	35	33.4	9.2	29	31.6	29	32.3	35	34.4	
獣医師	6	10.3	6.5	12	13.7	5.5	12.0	13	13.7	
商店員	40	36.7	7.4	40	36.4	38	35.5	36	36.0	
鉄道職員	26	26.4	8.4	24	23.7	24	25.8	30	32.4	
炭焼夫	44	38.6	9.3	47	41.1	40	37.2	47	41.6	
家畜診療所長	4	7.9	3.9	9	12.6	9.5	12.7	7	10.7	
理髪師	32	32.7	7.5	30	32.4	30	32.7	29	31.7	
大学教授	1	4.9	3.8	1	5.7	4	5.3	2	4.6	
農業試験場技師	12.5	15.7	9.3	14	16.3	16.5	14.8	12	12.5	
自作農	28	28.6	8.8	28	31.2	34.5	34.2	31	32.8	
土木建築技師	16	18.0	10.0	15	16.9	16.5	14.8	21	21.7	
行商人	49	41.2	10.3	49	41.9	43	38.2	48	42.3	
寺住職	29	31.6	11.6	34	33.6	28	29.7	27	29.4	
中学校教諭	12.5	15.7	8.8	13	15.4	12	13.0	9.5	11.3	
運搬人	46	39.0	6.7	46	40.9	45	38.8	46	41.5	
営農指導員	20	20.5	9.8	20	20.1	20	21.2	20	19.5	
印刷工	39	36.0	7.7	35	33.6	34.5	34.2	34	34.3	
警備官	22	22.2	13.4	19	19.5	22	22.0	22	22.5	
農協職員	21	21.4	8.6	25	25.2	26	29.3	23	22.6	
紡績工	45	38.9	6.8	42	37.4	39	37.0	38.5	36.2	
自作農	42	37.1	9.9	37	34.6	43	38.2	38.5	36.2	
栄養士	23	23.1	7.7	23	23.7	15	14.5	24	24.3	
小売店主	37	33.7	9.7	32	32.8	31	32.8	32	33.7	

職 種 職業名	学科名人数			獣 医 学 科 23人		酪 農 学 科 60人		栄 養 士 課 程 6人		総 合 農 学 科 10人	
	項 目	順 位	スコア	標準偏差	順 位	スコア	順 位	スコア	順 位	スコア	
機械工業技術者		19	20.2	11.1	10	13.0	8	12.5	15	16.9	
会社事務員		27	26.9	9.1	26	25.3	25	26.0	26	25.4	
パン製造工		47	39.4	5.5	43	37.7	49	45.3	42	39.8	
農業改良普及員		15	17.2	7.1	21	20.3	19	19.7	18	18.0	
医 師		5	8.5	6.9	5	9.3	1	2.0	8	11.2	
採 炭 夫		38	35.9	10.3	44	38.8	43	38.2	43	40.6	
指 物 師		34	33.3	9.3	41	37.0	37	34.8	37	36.1	
自動車運転手		30	31.9	9.1	33	32.9	36	34.3	40.5	36.3	
列車ボーイ		48	40.2	4.8	45	39.3	46	41.5	49	42.4	
自動車修理工		33	32.9	7.6	31	32.4	32	33.3	33	34.0	
高校教諭		8	13.0	8.5	7	12.1	5.5	12.0	5	9.6	
漁 業 者		41	36.9	9.6	39	36.2	41	37.5	44	40.9	
会社課長	9.5		14.7	10.4	11	13.4	11	12.8	11	11.8	
道路工夫		43	38.3	7.3	48	41.1	48	43.0	45	41.2	
保険勧誘員		36	33.6	12.1	38	35.6	47	42.3	28	30.9	
新聞記者		18	19.8	12.1	17	17.6	21	21.8	14	14.2	
くつみがき		50	44.7	9.6	50	45.1	50	48.8	50	46.3	
裁 判 官		3	7.3	9.3	4	8.4	2	3.3	4	9.2	
町工場主		24	23.9	12.2	22	23.1	27	29.5	19	18.1	
労組委員長		14	16.4	12.4	18	17.9	18	16.7	16	17.0	
大会社重役		7	12.1	14.2	3	8.2	9.5	12.7	3	5.0	
知 事		2	7.0	9.2	2	7.7	3	4.3	1	4.2	
大 学 生		25	25.4	13.8	27	27.6	23	23.5	22	22.5	

ある。獣医学科については各職種ごとにその順位の分散の程度を知るため標準偏差を算出して示してある。記入法において上位を1, 下位を50としてあるので、スコアは数値の小さいほど上位となり数値が大になるにしたがって下位に移る。スコアの最小値を1位とし最大値を50位として順位づけたのが順位欄であるが、スコアが同一でもその元の和が小なるものを上位とし、和が同一の場合は同順位として同順位項目数の中間値を順位名とした。順位の分散を示す標準偏差を獣医学科についてみると、最少は大学教授の3.8から最大は大会社重役の14.2までの数値となっている。数値の幅が50であるから14.2は分散が広すぎるようであるが、元来職業や社会的身分の階層的な判断は個人間には相当な違いがあり、とくに人世観や社会観あるいは階級意識の違いによって両極端に評価されうることを考えればこのあたりが普通の数値であるかもしれない。次に順位について各学科を比較してみると、個々の職種についてはそれぞれ順位を異にしており4~5位の偏差は普通であるが10位以上の偏差は認められない。これは学科の平均的な評価においては、部分的な順位の変動はあるが、全体としての順位の流れが共通であ

ることを示しているといえるであろう。第一志望学科によって整理したため学科の人数に偏りが生じ、非常に少数の学科があつてその資料数値の不安定さが危惧されたのであるが、少なくともこの資料に関するかぎり大きな誤差の危険性はあまりないようである。そこで各学科がどの程度階層判断について共通性をもっているかをみるため相関を調べてみた。相関はスピアマンの順位相関  $\rho$  とケンドールの順位相関  $\tau$  のいずれを選ぶか迷つたのであるが、基本が相対的順位であり順位相互間の値が必ずしも齊一でないこと、検定力は  $\rho$  も  $\tau$  も変わらないことなどから順位作成の性格を重視して  $\tau$  によることにした。その結果は表 2 である。最高が獣医学

表 2 昭和 35 年度入学者第一志望学科別 50 職種職業の格付け  
順位相関(ケンドール  $\tau_b$  値)

	総合農学科	栄養士課程	酪農学科
獣医学科	.84821	.83190	.86810
酪農学科	.86256	.84219	
栄養士課程	.80261		

注 最低  $\tau_b$  値 .80261 は  $tc=8.20061$   
したがって危険率 1/1000000 以下にて有意。

科と酪農学科の .86810 で次ぎが酪農学科と総合農学科の .86256、最低が総合農学科と栄養士課程で .80261 となっている。ここでは栄養士課程はどの学科に対しても比較的低い数値をとっているが、他の学科はほとんど男子のみから構成され栄養士課程は全員女子であることにも起因しているかもしれない。しかし最低  $\tau_b$  値 .80261 といえども危険率 1/1000000 以下で有意であり、各学科とも極めて高い相関があるといえるのである。これは各学科志望者に職種の社会的地位に関して特別な評価上の差がないことを示すか、またはあつてもそれは極く部分的なものであることを示しているのである。たしかに調査されている職種は社会における職業職種の代表的なものがそれぞれ上中下各階層から選出されているのであつて、広範な領域から 50 職種という多数の中では、表 1 で見られたような同一階層内の部分的な評価の差違は全体の中に埋没してしまうこともあり得るであろう。少なくとも表 2 の結果に関するかぎり、各学科とも職業的階層判断は同一であるといつても差支えないようである。しかしこれらの職業的階層判断は本学へ昭和 35 年に入学した者たちのみにもみられる特殊な姿であるかもしれない。一般社会の職業的階層判断と異なつてはいないであろうか。この点を吟味するには一般社会の職業的階層判断の結果との相関を求めればよい。この調査は元来尾高氏らの調査を基礎としたものであるから職種職業名に同一共通のものが多くあり、尾高氏らの調査の結果は職業名に順位を付して公表されている。したがつて表 1 の中から尾高氏の調査職業を抽出し順位を修整して相関をみればよい。まず 1952 年に行なわれた六大都市における資料に準拠し整理したのが表 3 である。六大都市の調査結果の順位を基準として、本学の各学科の順位との相関をケンドールの順

表3 昭和35年度入学者第一志望学科別25職種職業の格付け順位と1952年調査六大都市の職業の格付け順位との相関(ケンドール $\tau$ 値)

職種職業名	六大都市	獣医学科	酪農学科	栄養士課程	総合農学科
府 県 知 事	1	2	2	3	1
大 学 教 授	2	1	1	4	2
裁 判 官	3	3	4	2	4
大 会 社 重 役	4	5	3	6	3
医 師	5	4	5	1	6
官 庁(市役所)課 長	6	6	6	5	5
建 築(土木建築)技 師	7	8	7	8	11
町 工 場 主	8	12	12	13	10
労 働 組 合 委 員 長	9	7	10	9	8
新 聞 記 者	10	10	9	10	7
小 学 校 教 諭	11	9	8	7	9
寺 住 職	12	15	18	14	14
小 売 商 店 主	13	20	17	17	18
会 社 事 務 員	14	13	13	12	13
自 作 農	15	14	14	19	17
巡 査(警 官)	16	11	11	11	12
保 険 勧 誘 員	17	19	20	23	15
大 工	18	16	19	18	20
理 髪 師	19	17	16	16	16
旋 盤 工	20	18	15	15	19
漁 師	21	22	21	21	22
炭 坑(採炭)夫	22	21	22	22	21
炭 焼 夫	23	24	23	20	24
道 路 工 夫	24	23	24	24	23
く つ み が き	25	25	25	25	25
相 関 値 $\tau$		.833	.813	.753	.833

注1. 最低 $\tau$ 値.753は $t=5.488$  したがって危険率1/1000000以下にて有意。

2. 職種職業は1952年の調査と今回の調査とに共通するものを選び、順位を修整した。

3. 職種職業名は1952年の調査の表現を基礎とし多少修整したのものもある。

4. ( )内は今回の調査の表現である。

位相関値 $\tau$ でみると、最高獣医学科および総合農学科の.833から最低栄養士課程の.753である。ここでも栄養士課程の相関が低い、これも全員が女子であることからもたらされた結果であるかもしれない。しかし最低値.753も検定してみると $t=5.448$ となりやはり1/1000000以下の危険率で有意となって、はなはだ高い相関のあることが確認されたのである。六大都市は比較的知識水準が高くまた大学入学者も知識的に片寄りがあるかもしれないので、さらに尾高氏の全国調査と比較してみることにする。資料整理の手続きは表3におけると同様である。そ

表4 昭和35年度入学者第一志望学科別32職種職業の格付け順位と1955年調査全国の職業の格付け順位との相関(ケンドール  $\tau_b$  値)

大分類	標準分類	職種職業名	全 国	獣医学科	酪農学科	栄養士 課程	総 合 農 学 科
専門的 職業	専門業者	大学教授	1	1	1	2	1
		医師	2	2	2	1	3
		小学校教諭	7	6	7	6	6
	技術業者	寺住職	8	12	17	11	10
		機械工業技術者	5	7	4	4	5
		土木建築技術者	6	5	6	7	7
管理的 職業	公務管理者	市役所課長	3.5	4	3	3	2
	企業管理者	会社課長	3.5	3	5	5	4
事務的 職業	事務員	会社事務員	10	10	10	10	9
	保安業者	鉄道駅(職)員	11	9	9	9	13
		警 官	9	8	8	8	8
販売的 職業	商店主	小売店主	13	20	15	14	15
	商店員	商店員	22.5	23	23	21	19
	屋外販売人	保険勧誘員	16	19	21	30	11
		行商人	28	32	32	26	31
	サービス 業者	理髪師	16	15	13	13	12
		列車ボーイ	25	31	28	29	32
熟練的 職業	職 人	大 工	14	14	19	16	23.5
		指物師	19	17	24	20	20
	特殊技能工	自動車修理工	16	16	14	15	16
		印刷工	21	22	18	17.5	17
		パン製造工	25	30	26	32	25
半熟練 的職業	生産工程 従事者	旋盤工	19	18	12	12	18
		紡績工	25	28	25	22	21.5
	運輸業者	自動車運転手	19	13	16	19	23.5
非熟練 的職業	自作農	自作農	12	11	11	17.5	14
		小作農	27	25	20	26	21.5
	林業者	炭焼夫	30	27	30	23	30
		漁業者	22.5	24	22	24	27
	採鉱業者	採炭夫	30	21	27	26	26
	単純労働者	道路工	30	26	31	31	28
		運搬人	32	29	29	28	29
	相 関 値 $\tau_b$				.813	.813	.771

- 注1. 最低  $\tau_b$  値 .771 は  $\tau_c=6.130$  したがって危険率 1/1000000 以下にて有意。  
 2. 職種職業は1955年の調査と今回の調査とに共通するものを選び、同順位のものについては中間順位の表現に修整した。  
 3. 職種職業名は1955年の調査の表現を基礎とし多少修整したのものもある。  
 4. ( ) 内は今回の調査の表現である。

の結果が表4である。大分類の専門的職業においては寺住職を除いて他の職種はほぼ全国なみの順位である。寺住職の順位は全国の8位で相当に高く評価されているが、本学入学者においては総合農学科が10位、栄養士課程が11位、獣医学科が12位と僅かに下位に評価され全国の事務的職業に属する職種に近い地位に評価されているが、酪農学科では17位と非常に低く評価されている。宗教関係者は日本では英米より低く評価されている<sup>7)</sup>のであるが、本学入学者の評価はさらにそれを下廻っているのは本学入学者のみの特殊性であるか、あるいは大学入学を志望する人達の知識人的な片寄りであろうか。管理的職業については各学科の格付けは全国なみである。事務的職業についてもほぼ全国なみと認められる。販売的職業に属する職種においては商店員のように全国なみに近いものもあれば、小売店主における獣医学科や保険勧誘員における栄養士課程、列車ボーイにおける総合農学科のように、全国的順位からやや離れているものもある。熟練的職業においては自動車修理工のように全国的順位とほとんど同じに認めてよい職種もあり総体に全国的評価に近いようであるが、総合農学科の大工に対する格付けのように相当な差の認められるものもある。半熟練的職業においては酪農学科や栄養士課程が高く評価しているが他はまちまちであり、同様の傾向は非熟練的職業に属する職業にも認められる。専門的職業・管理的職業・事務的職業に属する各職種が全国的順位と本学各学科の順位との間に、寺住職を除いてすべて一位あるいは二位の差で評価されているのに対して、熟練的職業・半熟練的職業・非熟練的職業に属する各職種では、全国的順位と本学各学科の順位との差は比較的大きくなっている。しかしその相関は $r^2$ の最大値総合農学科.826から最低値栄養士課程.771の間であり、検定の結果はやはり危険率1/1000000で有意でありはなはだ高い相関があると認められる。これは一見して順位に相当な差がみられても、それはある階層内の部分的な上下であって階層を改造するほどの格付けの変動がないことを示すものといえるであろう。また本学入学者の各学科志望集団の職業的階層判断は、全般的な階層の評価についてはわが国人一般の評価と共通の評価を行なっていることも表3・表4からいえるのであって、寺住職のごとく部分的な一職種については別として全般的に常識的であるともいえるであろう。

このように常識的な階層判断が、志望する学科に関係の深い職業や職種についてはどのように作用しているか。前節の課題の設定で仮定したようにある学科を志望する者はその学科を卒業して就職する将来の自己の生活を托する職種職業を他学科に関連する職業よりも高く評価しているか否かを吟味しなければならない。その方法として調査の際に尾高氏らの調査項目となっていた職種や職業を基礎に、本学の卒業生が就職した将来就任するであろうと予想される職種職業などを追加して置いたそれらの追加職種に、さらにそれとほぼ同一階層と目されるいくつかの職種を加え16職種職業を選び、その16職種についてさらに順位を修整した。また各学科間の相対的偏差をみる基準として、各職種の各学科における順位の和を求めて最小値より順次1~16の順位を付して全学科の順位を設定した。表5における全学科順位は以上のよう

表5 昭和35年度入学者第一志望学科別専攻関係16職種職業の格付け順位と全学科平均順位との偏差および50職種職業格付けにおける標準偏差

職種職業名	全学科 順位	獣医学科			酪農学科			栄養士課程			総合農学科		
		表1のσ	順位	偏差	表1のσ	順位	偏差	表1のσ	順位	偏差	表1のσ	順位	偏差
高校教諭	1	8.5	3	-2	8.6	2	-1	4.8	1.5	-0.5	4.1	1	±0
市役所課長	2	9.5	6	-4	9.0	1	+1	4.2	3	-1	4.9	2	±0
家畜診療所長	3	3.9	1	+2	6.7	4	-1	5.5	5	-2	6.9	3	±0
獣医師	4	6.5	2	+2	5.3	7	-3	4.4	1.5	+2.5	6.8	8	-4
農協組合長	5	9.9	4.5	+0.5	6.0	3	+2	5.3	8	-3	5.8	4.5	+0.5
会社課長	6	10.4	4.5	+1.5	10.8	6	±0	8.3	6	±0	4.4	6	±0
中学校教諭	7	8.8	7.5	-0.5	9.4	8	-1	4.4	7	±0	4.9	4.5	+2.5
機械工業技術者	8	11.1	11	-3	6.7	5	+3	7.8	4	+4	10.1	9	-1
農業試験場技師	9	9.3	7.5	+1.5	7.6	9	±0	6.2	10.5	-1.5	7.4	7	+2
土木建築技師	10	10.0	10	±0	7.7	10	±0	10.0	10.5	-0.5	8.7	12	-2
農業改良普及員	11	7.1	9	+2	8.8	12	-1	10.4	12	-1	7.1	10	+1
営農指導員	12	9.8	12	±0	6.9	11	+1	5.4	13	-1	13.5	11	+1
栄養士	13	7.7	14	-1	7.6	13	±0	5.1	9	+4	7.6	15	-2
農協職員	14	8.6	13	+1	8.7	14	±0	10.6	16	-2	9.4	14	±0
大学生	15	13.8	15	±0	14.2	16	-1	10.8	14	+1	5.0	13	+2
会社事務員	16	9.1	16	±0	9.7	15	+1	12.2	15	+1	7.3	16	±0
標準偏差の平均		9.0			8.4			7.2			7.1		

注1. 表1のσは50職種職業の格付けスコアにおける標準偏差であり、表1においては獣医学科のスコアについてのみ記載しておいたものである。

2. 偏差欄の+符号は全学科の順位より上位にあることを示し、-符号は全学科の順位より下位であることを示している。

にして算出したものであり、各学科の偏差欄はこの全学科と各学科との順位の違いを求めたものであって、+符号はその学科のその職種の順位が全学科順位よりも上位にあることを示し、-符号は全学科順位よりも下位にあることを示しているのである。同表の表1のσ欄は表1における各学科の各職種のスコアの分散を示すものである。職業的階層判断は前にも述べたように個人差の大きなものであると考えられるのであるが、標準偏差が小であれば集中度が高いと考えられるから、その職種に対する各学生の評価がスコアを中心として集中しその職種の順位は安定度が高いと考えられる。このように職種の格付けの安定度を推定する資料として表1のσ欄を設けたのであるが、その最下段の平均は安定度の高低の基準として平均値を求めたものであって、平均値より小なる職種はその学科において比較的安定した評価を得ている職種であるとみるのである。ある学科においてある職種の順位が高く格付けされていても、その標準偏差が大であれば、その職種の順位は偶然の所産である蓋然性が強いといわなければならない。ある職種の順位が正当な意味をもつためには標準偏差の数値が比較的小でなければならないのである。以上の観点から表5を吟味する。獣医学科において分散が平均より小なる職種は家畜

診療所長・獣医師・農業改良普及員・栄養士・高校教諭・農協職員・中学校教諭であつて、全学科順位に比して上位にあるものは家畜診療所長・獣医師・農協組合長・会社課長・農業試験場技師・農業改良普及員・農協職員である。両者に共通の職種は家畜診療所長・獣医師・農業改良普及員・農協職員の四職種である。ここでこれらの職種が獣医学科においてどのような意味をもつかを知るために、入学志望者がかれらの学科の選択を行なう上に大きな資料となつたと認められている<sup>9)</sup> 大学入学案内の各学科の概要を転記しておく。

### 昭和 35 年度帯広畜産大学入学案内 各学科の概要

**獣医学科：**獣医学科は前身帯広高等獣医学校創立以来の伝統と完備した諸施設に基盤をおき、社会の要請に適した獣医師の養成を目的としている。

獣医師の免許は農林省で施行する獣医師国家試験に合格した者に授与される。卒業後は獣医臨床、畜産および家畜衛生行政、保健衛生行政、農業関係団体、乳業会社など広く社会の各分野に進出している。

**酪農学科：**酪農学科は国立大学ではただ一つの存在で、大小家畜を合理的に取入れた農業という意味の酪農を確立するために働く有為な経営者、指導者または研究者たるべき人を養成することを目的とする。

専門教育科目は必修科目の外に、卒業後の志望にしたがい、経営方面および製造方面のそれぞれに適するものを自分で選択し、各研究室で専門的に訓練を受けられるように編成されている。

栄養士課程は国民の食生活改善による体位向上および保健衛生方面の指導研究または実務に従事すべき栄養士(公務員上級職の待遇が受けられる)の養成を目的としていて、履修する専門科目は栄養士法に定められた学科目およびこれに準ずる本学科の関係科目で、このほかに家庭科その他の教員免許を得られる学科目を選択履修できるようになっている。

**総合農学科：**総合農学科はわが国における農学の従来までの方向に新機軸をうち出すため、戦後十二大学に新設された学科である。農畜産全般の技術と経済とにわたり総合的かつ実際的な能力を与えることを目標とし、実力ある教員、技術者、指導者、自営者を養成し、もつてわが国農業の進歩ならびに農民生活の向上に寄与することを目的とする。

履修科目はこれに必要なものを総合網羅するとともに、高学年においては各研究室において専門的訓練を行ない得よう編成されている。

本学科卒業生に対しては高等学校教諭農業二級免許状が与えられ、また科目の選択によっては中学校教諭職業一級免許状を得ることもできる。

酪農学科において分散が平均値より小なる職種をみると、獣医師・農協組合長・家畜診療

所長・機械工業技術者・営農指導員・農業試験場技師・栄養士・土木建築技師の順に分散が拡散し、順位において全学科順位より上位に評価されている職種は市役所課長・農協組合長・機械工業技術者・営農指導員・会社事務員であり、両者に共通の職種は農協組合長・機械工業技術者・営農指導員となって獣医学科とは異なった職種の性格がみられる。機械工業技術者は農学系において奇異の感が無いではないが、酪農製造方面の代表職種として評価されているのであるかもしれない。栄養士課程は全員女子であり独立した学科ではなく酪農学科の中の専攻コースであるが、教育課程の内容が他の学科と異なった特色をもっているため独立的にあつていているのであるが、女子あるいはその教育課程が原因しているのであろうか、今までの各表において見られるごとく他学科との相関も六大都市あるいは全国の格付けとの相関も各学科の中で最低の数値を示し特異な状態を示している。この課程の分散の比較的小であるものは、市役所課長・獣医師・中学校教諭・高校教諭・栄養士・農協組合長・営農指導員・家畜診療所長・農業試験場技師の順であり、全学科順位より上位にあるものは獣医師・機械工業技術者・栄養士・大学生・会社事務員であつて、両者に共通の職種は獣医師と栄養士である。最後に総合農学科の状態をみると、分散が平均値より小なる職種としては高校教諭・会社課長・市役所課長・中学校教諭・大学生・農協組合長・獣医師・家畜診療所長・農業改良普及員が挙げられ、全学科順位より上位に格付けされた職種としては中学校教諭、農業試験場技師・農業改良普及員・営農指導員・大学生が挙げられるが、高校教諭が全学科順位において一位でありこの学科においても一位であるため偏差が現れないことを考慮して加えておくのが至当であろう。ところでその両条件を充足する職種は高校教諭・中学校教諭・大学生・農業改良普及員となる。以上各学科において抽出された各職種は、前出の大学入学案内にある各学科の概要と照合するときにはほぼ予想される妥当な職種群であるといえよう。したがって受験生は大学入学案内の各学科の概要を読み、意識的あるいは無意識的に高く格付けしている職業職種に最も関係の深い学科を選択し、志望してきているといい得られるであろう。もちろん比較的少数例によって代表される学科もあり、一年のみの事例によって断定することは危険であるが、各学科の志望者はその学科に関係の深い職種を他の学科志望者よりも高く評価している傾向があるようだとはいえるであろう。このように各学科がそれぞれに特殊な職種を高く格付けしているとすれば、この16職種職業における順位は各学科相互の間にもどの程度の相関が成立するであろうか。従前の各種相関はすべて1/1000000以下の危険率で成立していたが、これは職業的階層の上下全階層を包含するものであり部分的特殊性は全体の中に埋没する状態であつたから、全般的な評価の流れが変らないかぎり非常に高い相関度を示すのは当然である。しかしこの16職種職業におけるように、大学生とか会社事務員のような二、三の例外を除いて、大部分が職業大分類の専門職種と管理職種に含まれほとんど同一階層に格付けされる職業職種からなる場合には、従前のような低い危険率で棄却することは不合理であろう。したがってここでは一般的に社会的統計

あるいは教育的また心理的統計が通常採用しているように1/100, すなわち1パーセントの危険率をもって棄却することにする。その計算の結果は表6であって、各学科相互にいずれも相関は有意である。ただ注目すべきことは栄養士課程と獣医学科・栄養士課程と総合農学科は危険率1/100では有意の相関を認め得るが、他の学科の組合せはすべて危険率1/1000以下で成立しているのであって、この四学科の中では栄養士課程は他の学科に比して職業的階層判断において多少異なった傾向をもっているようである。

表6 昭和35年度入学者第一志望学科別専攻関係16職種職業の格付け順位相関(ケンドール  $z_b$  値および  $t_c$  値)

	総合農学科	栄養士課程	酪農学科
獣医学科 $z_b$ ( $t_c$ )	.7127** (3.79)	.6218* (3.29)	.6527** (3.47)
酪農学科 $z_b$ ( $t_c$ )	.7265** (3.87)	.6694** (3.56)	
栄養士課程 $z_b$ ( $t_c$ )	.6121* (3.25)		

注 \*\*印は危険率1/1000以下にて有意。

\*印は危険率1/100以下にて有意。

以上昭和35年度入学の第一志望学科集団の職業的階層判断を吟味してきたのであるが、その結果いえることは、社会における全般的な職業的階層判断については各学科とも非常に常識的であり、全国あるいは六大都市あるいは各学科相互を比較してもほとんど同じ傾向をもっていること、しかし各学科に深い関係のある職種については各学科それぞれの特色をもち、その学科に関係の深い職種を高位に格付けし、しかもその分散は比較的安定している傾向がみられること、さらにそれら各学科に深い関係のある職種の特殊な高位格付けも、各学科集団の職業的階層判断が異なっているとはいえないで、危険率1/100以下で考えればむしろ同じような性格であるといえること、などである。

#### 4. 昭和38年度入学者の資料分析

前節において昭和35年度入学者の資料について分析吟味し一応の結論を見出したのであるが、一箇年のみの資料では検定の危険率をいかに小さく見積ってもなお原資料そのものの偶然性が危惧される。また職業的階層判断のごとき社会事象への評価は年とともに変化する可能性も推測されないわけのものでもない。このような観点からさらに別の年度の資料と比較することが堅実な結論への一方法である。よって昭和38年度入学者の資料を整理して分析吟味し、昭和35年度入学者についてみられた事実が再び確認されるか否か、また異なっているとすればどのように異なるか、職業的階層判断に年度による変化あるいは特性はないかなどについて検討してみることにする。

昭和38年度における本学の学科構成は、獣医学科・酪農学科・生活科学専攻・農産化学科・農業工学科である。獣医学科は昭和35年度と全く同じ学科であるが、酪農学科は昭和35年度にあった総合農学科の募集停止にともなって内容的に多少変更されている。生活科学専攻は昭和35年度における栄養士課程に相当する女子のみのコースであるが、栄養士の資格授与をとりやめて教育課程を変更し改称したものである。農産化学科は昭和36年度に新設、農業工学科は昭和38年度に新設された学科である。それぞれの学科の目的や教育内容については入学志望者が学科選択の拠りどころとする入学案内の各学科の概要を参考のために記しておく。

### 昭和38年度帯広畜産大学入学案内 各学科の概要

**獣医学科：**獣医学科は前身帯広高等獣医学校創立以来の伝統と完備した諸施設に基盤をおき、社会の要請に適した獣医師の養成を目的としている。獣医師の免許は農林省で施行する獣医師国家試験に合格した者に授与される。卒業後は獣医臨床、畜産および家畜衛生行政、保健衛生行政、農業関係団体、乳業会社など広く社会の各分野に進出している。

**酪農学科：**酪農学科は酪農経営および酪農製造の技術と経済にわたり基礎的ならびに実際教育を行なうことにより、実力ある研究者、技術者、指導者、教員あるいは自営者を養成し、もってわが国酪農および畜産の発展に寄与することを目的とする。卒業生は公務員、団体職員、会社員、教員等として広く各界で活躍している。なお、生活科学専攻者は家庭科、保健科および理科の教員免許を得るのに必要な科目を選択履修できるようになっている。

**農産化学科：**農産化学科は農林産工業、食品工業の技術と農産機械、熱管理などの技術に堪能なる指導者、自営者、研究者の養成を目的としている。高学年には農産、林産、食品、機械各研究実験室と工場に出入し、産学協同による工場と工場技術者、試験場技術者の大学教育への参加により、実際に役立つ技術者の訓練を施し得るようになっている。

**農業工学科：**農業工学科は、農業および畜産に必要な工学的技術の理論ならびに実際に堪能な技術者、指導者、研究者を養成し、もってわが国農畜産業の近代化に寄与することを目的としている。履修科目として農業工学の専門科目、工学基礎科目ならびに関連科目が準備され、高学年においては作業機工学、草地機械学、トラクター工学、開発土木学の各研究室に所属して、それぞれの専門につき特に高度の訓練を受け得るようになっている。

本学科の特質にかんがみ、実験室における工学的実験はもちろん農場実習、工場実習、現場実習等を通じて、卒業後に農業および関連工業の諸分野に広く進出し得る実際的訓練を行なう。

資料の整理の方法はすべて昭和35年度と同一にした。まず調査した全職種職業についての格付け順位とスコアは表7のとおりである。これは表1に対応するものであって、昭和35

表7 昭和38年度入学者第一志望学科別50職種職業の格付け順位

職 種 職業名	獣医学科 25人		酪農学科 43人		生活科学専攻 7人		農産化学科 35人		農業工学科 17人	
	順 位	スコア	順 位	スコア	順 位	スコア	順 位	スコア	順 位	スコア
大 工	30	30.6	29	29.5	28	29.4	37	34.3	40	35.5
市役所課長	12	17.8	12	15.6	14	16.4	7	12.3	5	10.1
農協組合長	22	23.2	16	18.0	19.5	19.0	11	14.8	12	14.4
小学校教諭	13	18.2	15	16.9	11	15.4	14	17.1	13	17.1
旋盤工	39	33.6	32	30.7	35	35.5	31	32.1	39	35.4
獣医師	4	9.3	7	14.2	6	8.2	10	14.6	15	18.0
商店員	41	34.2	35	34.0	33	34.1	39	35.2	30.5	33.3
鉄道職員	23	24.1	22	24.4	45.5	39.5	25	25.9	25	26.5
炭焼夫	42	34.5	42	36.1	50	43.7	43	38.1	44.5	38.0
家畜診療所長	8	14.8	14	16.8	9	13.4	12	15.6	14	17.2
理髮師	34	31.8	38	34.8	27	28.7	35	33.7	36.5	34.5
大学教授	3	7.8	2	8.4	2	3.0	1	4.0	3	7.0
農業試験場技師	11	17.2	9	14.3	8	11.1	15	18.0	8	13.2
自作農	24	24.8	23.5	25.6	22	23.2	29	31.3	24	24.9
土木建築技師	7	14.6	10	14.5	15	16.5	18	19.3	6	11.3
行商人	49	39.0	50	42.2	48	41.0	45	38.9	50	43.9
寺住職	36	33.0	31	30.6	24.5	26.1	30	31.7	34	34.1
中学校教諭	10	16.2	11	15.6	10	14.4	9	14.4	21	20.7
運搬人	48	38.2	47	38.2	47	40.2	49	41.2	49	40.1
営農指導員	20.5	23.0	19	20.0	16	17.2	22	21.3	18	18.7
印刷工	33	31.6	33	32.2	39	36.4	38	34.7	38	35.2
警官	18	21.9	25	26.0	26	26.5	20	21.1	22	23.5
農協職員	25	26.2	26	26.1	30	31.0	26	27.0	27	28.9
紡績工	40	34.1	39	35.2	40	38.4	40	37.3	43	36.2
小作農	38	33.2	45	37.3	37	35.8	46	39.3	35	34.2
栄養士	15	19.4	21	22.7	18	18.2	23	22.8	26	26.7
小売店主	37	33.1	30	30.1	23	25.7	28	30.9	30.5	33.3
機械工業技術者	9	16.2	8	14.2	13	16.2	13	16.1	7	11.9
会社事務員	28	28.0	28	28.9	32	32.5	24	25.2	23	24.3
パン製造工	46	36.1	44	36.8	49	42.2	41	37.4	42	35.7
農業改良普及員	19	22.7	18	19.4	12	15.7	21	21.2	20	20.5
医師	2	6.4	1	7.2	3	4.1	2	5.1	4	8.7
採炭夫	47	36.2	41	36.0	44	39.1	44	38.8	36.5	34.5
指物師	44	35.1	43	36.1	34	34.4	36	34.0	46	38.8
自動車運転手	31	31.0	34	32.6	31	32.2	33	32.7	29	31.1
列車ボーイ	35	32.7	46	37.7	36	35.7	42	37.8	41	35.6
自動車修理工	32	31.6	37	34.8	41	38.5	32	32.6	33	33.8
高校教諭	6	13.4	5	11.2	7	9.7	6	11.8	10	13.7

職 種 職業名	獣医学科 25人		酪農学科 43人		生活科学専攻 7人		農産化学科 35人		農業工学科 17人	
	順 位	スコア	順 位	スコア	順 位	スコア	順 位	スコア	順 位	スコア
漁 業 者	29	30.1	36	34.3	38	36.1	48	39.7	44.5	38.0
会 社 課 長	20.5	23.0	13	16.6	17	18.0	8	13.6	9	13.5
道 路 工 夫	45	35.5	48	39.1	45.5	39.5	47	39.7	48	39.5
保 険 勧 誘 員	43	35.0	40	35.9	42	38.7	34	33.4	32	33.7
新 聞 記 者	17	21.8	17	18.1	19.5	19.0	16	18.1	19	20.4
く つ み が き	50	38.6	49	39.8	43	39.0	50	43.0	47	38.8
裁 判 官	1	5.6	3	8.6	1	2.1	5	7.7	2	5.0
町 工 場 主	27	27.8	27	26.3	24.5	26.1	19	20.4	17	18.1
労 組 委 員 長	16	21.6	20	21.0	21	22.0	17	18.6	16	18.0
大 会 社 重 役	14	18.8	6	12.7	4	6.8	4	6.2	1	4.8
知 事	5	12.0	4	9.6	5	7.0	3	5.8	11	13.8
大 学 生	26	27.1	23.5	25.6	29	30.4	27	28.0	28	30.0

表 8 昭和 38 年度入学者第一志望学科別 50 職種職業の格付け  
順位相関(ケンドール  $\tau_b$  値)

	農業工学科	農産化学科	生活科学専攻	酪農学科
獣医学科	.73120	.75443	.75081	.84034
酪農学科	.78513	.83772	.79003	
生活科学専攻	.70535	.74331		
農産化学科	.80049			

注 最低  $\tau_b$  値 .70535 は  $t_c=7.21201$   
したがって危険率 1/1000000 以下にて有意。

年度に比して職種各学科間の偏差は多少大きくなっているようであるが、全体としての順位の傾向は変わらないようである。それを示すのが表 8 である。 $\tau_b$  値の最高は獣医学科と酪農学科の相関で次ぎが酪農学科と農産化学科次いで農産化学科と農業工学科であり、最低値は生活科学専攻と農業工学科との相関であり、.70535 は昭和 35 年度の最低相関値より小である。しかし検定の結果は昭和 35 年度同様 1/1000000 以下の危険率で有意である。各学科の組合せをみるといずれの学科もいずれか一つの組合せは  $\tau_b$  .8 台のものがあるが、生活科学専攻のみはいずれの学科とも相関値が .7 台にとどまっているのはやはり全員女子であることに起因するものであるかもしれず昭和 35 年度と同傾向である。六大都市の職業の格付け順位との比較をみようとしたのが表 9 であるが、これも昭和 35 年度入学者のそれに比して各職業とも多少偏差が大であるような印象を一べつして受けるのであるが、相関値  $\tau$  または  $\tau_b$  は .801 から .720 の間にあり、最低値獣医学科の .720 は  $t=5.018$  であって 1/1000000 以下の危険率で有意であり各学科とも六大都市の職業階層判断と極めて高い相関があることが知られる。さらに全国の職

表9 昭和38年度入学者第一志望学科別25職種職業の格付け順位と1952年調査六大都市の職業の格付け順位との相関( Kendall's  $\tau$  または  $\tau_b$  値)

職種職業名	六大都市	獣医学科	酪農学科	生活科学専攻	農産化学科	農業工学科
府 県 知 事	1	4	4	5	3	7
大 学 教 授	2	3	2	2	1	3
裁 判 官	3	1	3	1	5	2
大 会 社 重 役	4	8	5	4	4	1
医 師	5	2	1	3	2	4
官 庁(市役所)課 長	6	6	7	7	6	5
建 築(土木建築)技 師	7	5	6	8	10	6
町 工 場 主	8	13	13	13.5	11	10
労 働 組 合 委 員 長	9	9	10	10	9	9
新 聞 記 者	10	10	9	9	8	11
小 学 校 教 諭	11	7	8	6	7	8
寺 住 職	12	18	17	13.5	16	17
小 売 商 店 主	13	19	16	12	14	15
会 社 事 務 員	14	14	14	18	13	13
自 作 農	15	12	11	11	15	14
巡 査(警官)	16	11	12	15	12	12
保 険 勧 誘 員	17	22	21	21	18	16
大 工	18	16	15	17	20	21
理 髮 師	19	17	20	16	19	18.5
旋 盤 工	20	20	18	19	17	20
漁 師	21	15	19	20	24	22.5
炭 坑(採炭) 夫	22	24	22	23	22	18.5
炭 焼 夫	23	21	23	25	21	22.5
道 路 工 夫	24	23	24	24	23	25
く つ み が き	25	25	25	22	25	24
相 関 値 $\tau$ または $\tau_b$		.720	.786	.783	.800	.801

- 注1. 最低 $\tau$ 値.720は $t=5.018$  したがって危険率1/1000000以下にて有意。  
 2. 職種職業は1952年の調査と今回の調査とに共通するものを選び、順位を修整した。  
 3. 職種職業名は1952年の調査の表現を基礎とし多少修整したものもある。  
 4. ( )内は今回の調査の表現である。

業の格付け順位との比較をみると表10のとおりで、昭和35年度におけると同様寺住職においては各学科とも相当に低く評価しているのが顕著に目立つが、大分類の専門的職業に属する他の職種においてはほぼ昭和35年度同様僅かな偏差を示すのみでそれほど大した経庭はない。管理的職業に属する職種では昭和35年度に比較して各学科とも会社課長に対する評価が一律に低く、農産化学科の格付け順位だけがほぼ全国なみの評価に近い。事務的職業においては生活科学専攻が会社事務員と鉄道駅員、とくに鉄道駅員においてはなほだしく低く格付けしてい

表 10 昭和 38 年度入学者第一志望学科別 32 職種職業の格付け順位と 1955 年調査全国の職業の格付け順位との相関(ケンドール  $\tau_b$  値)

大分類	標準分類	職種職業名	全 国	獣医学科	酪農学科	生活科学 専攻	農 化 学 科	農 工 学 科
専門的 職 業	専門業者	大 学 教 授	1	2	2	1	1	1
		医 師	2	1	1	2	2	2
		小 学 校 教 諭	7	6	7	3	6	7
	技術業者	寺 住 職	8	19	14	10	13	17
		機 械 工 業 技 術 者	5	4	3	4	5	5
		土 木 建 築 技 術 者	6	3	4	6	7	4
管理的 職 業	公務管理者	市 役 所 課 長	3.5	5	5	5	3	3
	企業管理者	会 社 課 長	3.5	8	6	7	4	6
事務的 職 業	事 務 員	会 社 事 務 員	10	11	11	15	9	9
	保安業者	鉄 道 駅 (職) 員	11	9	8	27.5	10	11
		警 官	9	7	10	11	8	8
販売的 職 業	商 店 主	小 売 店 主	13	20	13	9	11	13.5
	商 店 員	商 店 員	22.5	24	18	16	22	13.5
	屋外販売人	保 険 勧 誘 員	16	26	23	25	17	15
		行 商 人	28	32	32	30	28	32
	サービス者	理 髪 師	16	17	21	12	18	19.5
		列 車 ポ ー イ	25	18	29	19	25	24
熟練的 職 業	職 人	大 工	14	13	12	13	20	23
		指 物 師	19	27	26	17	19	29
	特殊技能工	自 動 車 修 理 工	16	15	20	24	15	16
		印 刷 工	21	16	16	22	21	21
		パ ン 製 造 工	25	29	27	31	24	25
半熟練的 職 業	生 産 工 程 者	旋 盤 工	19	22	15	18	14	22
	従 事 者	紡 績 工	25	23	22	23	23	26
	運 輸 業 者	自 動 車 運 転 手	19	14	17	14	16	12
非熟練的 職 業	自 作 農	自 作 農	12	10	9	8	12	10
	小 作 農	小 作 農	27	21	28	20	29	18
	林 業 者	炭 焼 夫	30	25	25	32	26	27.5
	漁 業 者	漁 業 者	22.5	12	19	21	31	27.5
	採 鉱 業 者	採 炭 夫	30	30	24	26	27	19.5
	単純労働者	道 路 工 夫	30	28	31	27.5	30	30
		運 搬 人	32	31	30	29	32	31
相 関 値 $\tau_b$				.712	.773	.694	.850	.731

- 注 1. 最低  $\tau_b$  値 .694 は  $tc=5.526$  したがって危険率 1/1000000 以下にて有意。  
 2. 職種職業は 1955 年の調査と今回の調査とに共通するものを選び、同順位のものについては中間順位の表現に修整した。  
 3. 職種職業名は 1955 年の調査の表現を基礎とし多少修整したものもある。  
 4. ( ) 内は今回の調査の表現である。

るが、他学科は全国なみといえる。販売的職業に分類される各職業においては獣医学科の小売店主・保険勧誘員・列車ボーイに対する評価、酪農学科の保険勧誘員・理髪師・商店員に対する評価、生活科学専攻の保険勧誘員・列車ボーイ・商店員などに対する評価、さらに農業工学科の商店員に対する評価が全国の評価に比較すると大きな差を示しているが、他はほぼ全国的评价に近いものとみてよいようである。しかし専門的職業や管理的職業に属する各職種よりも偏差は大である傾向があることは昭和35年度にみられたのと同様である。熟練的職業に分類されている各職種についてみると指物師に対する各学科の評価が全国の評価との差が大きく、生活科学専攻の自動車修理工、農業工学科の大工に対する評価の低さがやや目立つ程度であって、他は昭和35年度の評価よりも全国の評価に近いように見受けられる。半熟練的職業に関しては昭和35年度同様の傾向であるが、各学科とも自動車運転手に対する評価において全国の格付け順位より上位である。非熟練的職業に属する職種に対する各学科の評価はまちまちであって、全国の評価に比して上下の偏差の大である漁業者のような職種もあれば、自作農のように全国の十二位に対して八位から十二位と比較的近く評価されている職種もある。いずれにしてもやはり表10においては専門的職業と管理的職業に属する職種は、寺住職と会社課長を除いて各学科の評価は全国の評価との差は少なく、事務的職業・販売的職業・熟練的職業・半熟練的職業・非熟練的職業に属する職種の格付け順位はやや全国の評価より差を開いているとみられる。この傾向は昭和35年度においてもみられた傾向である。次に各学科の順位と全国の順位との相関をみると、最大値農産化学科の.850から最低値生活科学専攻の.694の間にあり、最低値の $t_c$ は5.526であって危険率1/1000000以下で有意であり、昭和35年度同様極めて高い相関を示している。

以上の点から昭和38年度入学者の職業的階層判断は、部分的個々の職種職業の評価において多少の差はあるにしても、全般的に眺めれば昭和35年度入学者と同様の傾向を示し、ほぼ常識的な判断傾向をもつものであるといえる。次に各学科に関係の深い職種を主体とする16職種について各学科の格付けの性格をみることにする。表11がそれである。獣医学科において分散値が比較的小で評価の安定度が高いとみられる職種は獣医師・栄養士・農協職員・土木建築技師・機械工業技術者・中学校教諭・会社事務員・家畜診療所長・営農指導員であって全学科順位より上位に評価されている職種は獣医師・土木建築技師・家畜診療所長・中学校教諭・農業改良普及員・営農指導員・栄養士・大学生である。両方の条件を満たす職種は獣医師・土木建築技師・家畜診療所長・中学校教諭・栄養士の五職種である。これを昭和35年度と比較すると獣医師と家畜診療所長の二職種が共通であって、この二職種が獣医学科の専門職種の根幹であることは入学案内の学科の内容に照らしても明瞭である。ただここに疑点の生ずるのは土木建築技師の評価が高いことである。次に酪農学科について吟味してみると、分散においては獣医師・農業試験場技師・高校教諭・機械工業技術者・営農指導員・中学校教諭・

表 11 昭和 38 年度入学者第一志望学科別専攻関係 16 職種職業の格付け順位と全学科平均順位との偏差および 50 職種職業格付けにおける標準偏差

職種職業名	全学科 順位	獣医学科			酪農学科			生活科学専攻			農産化学科			農業工学科		
		表 7 のσ	順位	偏差	表 7 のσ	順位	偏差	表 7 のσ	順位	偏差	表 7 のσ	順位	偏差	表 7 のσ	順位	偏差
高校教諭	1	10.0	2	-1	8.1	1	±0	3.2	2	-1	7.7	1	±0	7.8	6	-5
獣医師	2	3.6	1	+1	5.3	2	±0	3.3	1	+1	7.9	5	-3	9.4	9	-7
市役所課長	3.5	13.3	8	-4.5	10.1	7	-3.5	10.0	8	-4.5	8.5	2	+1.5	4.1	1	+2.5
機械工業技術者	3.5	7.9	5	-1.5	8.1	3	+0.5	9.5	7	-3.5	10.1	8	-4.5	10.2	3	+0.5
農業試験場技師	5	10.6	7	-2	7.2	4	+1	4.0	3	+2	9.8	9	-4	4.7	4	+1
土木建築技師	6	7.8	3	+3	10.6	5	+1	13.5	9	-3	10.0	10	-4	10.1	2	+4
家畜診療所長	7	8.9	4	+3	10.4	9	-2	5.7	4	+3	7.0	7	±0	8.8	8	+1
中学校教諭	8	8.8	6	+2	9.4	6	+2	3.7	5	+3	8.9	4	+4	12.2	12	-4
会社課長	9	15.4	11.5	-2.5	12.5	8	+1	13.4	11	-2	8.8	3	+6	9.3	5	+4
農協組合長	10.5	11.8	13	-2.5	9.8	10	+0.5	8.6	13	-2.5	7.0	6	+4.5	8.8	7	+3.5
農業改良普及員	10.5	12.8	10	+0.5	11.0	11	-0.5	6.1	6	+4.5	11.1	11	-0.5	11.5	11	-0.5
営農指導員	12	9.8	11.5	+0.5	8.3	12	±0	7.6	10	+2	8.8	12	±0	7.5	10	+2
栄養士	13	6.8	9	+4	9.7	13	±0	6.6	12	+1	8.8	13	±0	9.8	14	-1
農協職員	14	7.5	14	±0	11.9	15	-1	9.8	15	-1	8.9	15	-1	6.5	15	-1
会社事務員	15.5	8.8	16	-0.5	11.3	16	-0.5	10.9	16	-0.5	8.2	14	+1.5	9.3	13	+2.5
大学生	15.5	14.3	15	+0.5	13.3	14	+1.5	12.2	14	+1.5	14.2	16	-0.5	12.7	16	-0.5
標準偏差の平均		9.8			9.8			8.0			9.1			8.9		

注 1. 表 7 の σ は 50 職種職業の格付けスコアにおける標準偏差である。  
 2. 偏差欄の + 符号は全学科の順位より上位にあることを示し、- 符号は全学科の順位より下位であることを示している。

栄養士・農協組合長の順であり、全学科順位より上位の職種は農業試験場技師・機械工業技術者・土木建築技師・中学校教諭・会社課長・農協組合長・大学生それに順位一位の高校教諭で両者の共通職種は高校教諭・機械工業技術者・中学校教諭・農協組合長・農業試験場技師である。これを獣医学科と比較すると中学校教諭が共に評価されているが他はそれぞれ異なっており獣医学科と酪農学科の性格の違いを示している。これを昭和 35 年度の酪農学科入学者のそれと比較すると、昭和 35 年度においては農協組合長・機械工業技術者・営農指導員であって、両年度に共通の職種は農協組合長と機械工業技術者であるが、昭和 35 年度の営農指導員に対する評価は昭和 38 年度においては農業試験場技師という研究職に代っている。機械工業技術者は昭和 35 年度において酪農製造方面の代表職種として評価されているのではないかと疑点を残しておいたが、その後酪農学科を母体とし農産化学科が増設され、酪農学科の内部においても製造関係で化学的機械的の科目が拡充されていることからみると必ずしも当を得ない職種でもないようである。昭和 38 年度において高校教諭と中学校教諭の教育職種が含まれているが、これは昭和 35 年度と昭和 38 年度の入学内の学科の概要を比較すれば明らかのように、

昭和 38 年度においては募集停止にした総合農学科の使命を酪農学科に肩代りして卒業後の職業として教員を明示したことから由来しているとみられる。このように酪農学科の機械関係や昭和 35 年度の総農的性格が昭和 38 年度では酪農学科に直ちに反映していることを如実に示されると、大学入学志願者が思いの外に真剣に学科の選択に苦心し入学案内を味読していることを知らされる。職業指導の立場から考えて、大学も高等学校も大学入学志望者に対して可能なかぎり詳細で正確な学部や学科の情報を提供することが必要であると思われる。また大学関係者の立場から考えて、そのような情報の提供がより良い学生を多数集めるためには必要なのではないかと思われる。次ぎに生活科学専攻について調査するのであるが先にも述べたように、昭和 35 年度の栄養士課程との間にどのような相違があるかが問題点である。分散が小さい職種は高校教諭・獣医師・中学校教諭・農業試験場技師・家畜診療所長・農業改良普及員・栄養士・営農指導員で、全学科順位より上位に評価されている職種は獣医師・農業試験場技師・家畜診療所長・中学校教諭・農業改良普及員・営農指導員・栄養士・大学生で、両者に共通の職種は獣医師・農業試験場技師・家畜診療所長・中学校教諭・農業改良普及員・営農指導員・栄養士の七職種である。昭和 35 年度において獣医師と栄養士の二職種のみであり、とくに栄養士の偏差は +4 であったことに比較すると、今年度の栄養士は +1 で他学科との差が少ない。栄養士課程のように明確な目標を有しない生活科学科の性格を示しているといえるかもしれない。なお偏差欄において + 符号にならなかったが -1 の高校教諭が最小の標準偏差値をもって順位の二位にあること、中学校教諭の標準偏差が 3.7 と極めて小で集中度が高く偏差も +3 と比較的大であること、農村において生活改良普及員と同一職場で共働する農業改良普及員が偏差 +4.5 で他学科との違いが大であることなども特色といえはいるかもしれないが、これはまた今後の入学者と比較検討しなければならない問題である。農産化学科の分散の欄では農協組合長・家畜診療所長・高校教諭・獣医師・会社事務員・市役所課長・会社課長・営農指導員・栄養士・中学校教諭・農協職員が分散の集中度が高く、偏差の欄では市役所課長・中学校教諭・会社課長・農協組合長・会社事務員それに順位で一位の高校教諭が全学科より上位に格付けされている。両方の条件を満足させる職種は高校教諭・市役所課長・中学校教諭・会社課長・農協組合長・会社事務員の比較的多数の職種が挙げられる。入学案内から推測すれば機械工業技術者などが浮かび上ってくると思われるのであるが、これは標準偏差値 10.1 でまだ不安定な状態であり、個人的に相当高く格付けている者もあることを示しているが、全体としては機械技術者としては踏み切れない状態にあるとみられる。むしろ入学案内の産学協同に注目してか会社課長・会社事務員が高く評価され、加えて入学案内からは直接推測できない高校教諭・中学校教諭の教職が高く格付けされていること、また会社課長・市役所課長・農協組合長といった管理職が高く評価されていることも注目に値する点であろう。なお現在の二、三年生の農産化学科の学生で教職科目を履修している者が他学科の履修に比して多いことも、農産

化学科のこの結果と比較して意味のあることであるといえるかもしれない。最後に本年度新設された農業工学科について検討することにする。分散値の小さい職種は市役所課長・農業試験場技師・農協職員・営農指導員・高校教諭・家畜診療所長・農協組合長の順である。全学科の順位より上位に格付けされている職種は市役所課長・機械工業技術者・農業試験場技師・土木建築技師・家畜診療所長・会社課長・農協組合長・営農指導員・会社事務員である。両項に共通の職種は市役所課長・農業試験場技師・家畜診療所長・農協組合長・営農指導員となる。いずれも酪農学科あるいは従来の総合農学科に類する姿を呈していて工学的な色彩はみられない。それは調査職種に化学的工学的な職種が少ないこともあるし、受験生がまず畜産大学の畜産の名にひかれて畜産に志望するものが願書を入手し、工学的志望を有するものは初めから畜産大学を無縁のものとして入学案内を見ない者が多いことに起因するのであるかもしれない。この学科における機械工業技術者や土木建築技師の職種の格付けがそれぞれ学科内で三位と二位を占めながら分散がそれぞれ10.2と10.1であることは、これらの職種を高く評価する者も多いが非常に低く評価している者も相当数あることを示している。本学科についてもまた農産化学科についても生活科学専攻についても、学科の性格を正確に見出すためには、調査職種を改訂する必要があるであろう。これら16職種の格付け順位の各学科相互の相関を調査した結果が表12である。検定の危険率は1/100で表6の場合と同様である。相関が有意であるのは獣医学科と酪農学科・獣医学科と生活科学専攻・酪農学科と生活科学専攻が危険率1/1000で、酪農学科と農産化学科・酪農学科と農業工学科が危険率1/100以下である。農産化学科と獣医学科・農産化学科と生活科学専攻・農産化学科と農業工学科・農業工学科と獣医学科・農業工学科と生活科学専攻との組合せは危険率1/100以下では棄却できないので相関は低いといわなければならない。すなわち全般的な職業階層判断においては常識的である人達も、その関係の深い職業については関係の稀薄な人達とは違った評価を行ない、みずから志望する学科に関係

表12 昭和38年度入学者第一志望学科別専攻関係16職種職業の格付け順位相関(ケンドール $\tau$ または $zb$ 値, および $t$ または $tc$ 値)

	農業工学科	農産化学科	生活科学専攻	酪農学科
獣医学科 $zb$ ( $tc$ )	.3590 (1.89)	.4425 (2.34)	.7265** (3.87)	.7265** (3.87)
酪農学科 $\tau$ ( $t$ )	.506* (2.70)	.600* (3.19)	.700** (3.73)	
生活科学専攻 $\tau$ ( $t$ )	.283 (1.48)	.466 (2.47)		
農産化学科 $\tau$ ( $t$ )	.483 (2.56)			

注 \*\*印は危険率1/1000以下にて有意。  
\*印は危険率1/100以下にて有意。

の深い職種を高く評価する傾向があること、さらにある学科の志望者の集団は学科相互に同一と認めてよい集団と同一と認めることが危険である集団とがあるといえるのである。

### 5. 昭和35年度と昭和38年度との比較

表題については前節においてそれぞれの分析の場で比較してきたのであるが、ここでは職業の階層的判断が年度的に恒常性を有するものかあるいはその年度によって特性が見出されるかを検討してみたい。

ある学科を志望する者はある職種を高く評価することは前々節および前節において吟味してきたのであるが、その際に年度によっていくつかの職種が交替していることを知ったのである。これを手がかりとして年度間の関係を調査することにする。そのために昭和35年および昭和38年度の専攻関係16職種について、両年度に共通の学科および共通に近い学科の両年度の総合順位と各年度との偏差を出してみた。総合順位は表5・表11の全学科順位と同様の算

表13 第一志望学科別専攻関係16職種職業の格付け順位の昭和35年度入学者と昭和38年度入学者との比較(ケンドール $\tau$ または $zb$ 値)

職種職業名	獣医学科			酪農学科			栄養士課程・生活科学専攻		
	両年度総合順位	35年度偏差	38年度偏差	両年度総合順位	35年度偏差	38年度偏差	両年度総合順位	35年度偏差	38年度偏差
市役所課長	6	±0	-2	2.5	+1.5	-4.5	4.5	+1.5	-3.5
農協組合長	10	+5.5	-3	6	+3	-4	11.5	+3.5	-1.5
獣医師	1	-1	±0	4	-3	+2	1	-0.5	±0
家畜診療所長	2.5	+1.5	-1.5	6	+2	-3	3	-2	-1
農業試験場技師	7	-0.5	±0	6	-3	+2	7	-3.5	+4
土木建築技師	4	-6	+1	10	±0	+5	10	-0.5	+1
中学校教諭	5	-2.5	-1	8.5	+0.5	+2.5	6	-1	+1
営農指導員	13	+1	+1.5	11	±0	-1	13	±0	+3
農協職員	14	+1	±0	14	±0	-1	15.5	-0.5	+0.5
栄養士	12	-2	+3	13	±0	±0	11.5	+2.5	-0.5
機械工業技術者	8.5	-2.5	+3.5	2.5	-2.5	-0.5	4.5	+0.5	-2.5
会社事務員	16	±0	±0	16	+1	±0	15.5	±0	-0.5
農業改良普及員	11	+2	+1	12	±0	+1	9	-3	+3
高校教諭	2.5	-1.5	+0.5	1	-1	±0	2	+0.5	±0
会社課長	8.5	+4	-3	8.5	+2.5	+0.5	8	+2	-3
大学生	15	±0	±0	15	±0	+1	14	±0	±0
相関値 $\tau$ または $zb$ ( $t$ または $tc$ )	.46121 (2.43860)			.51666* (2.70135)			.53556* (2.84216)		

注1. \*は危険率1/100以下にて有意。

2. 偏差欄の+符号は総合順位より上位にあることを示し、-符号は総合順位より下位であることを示している。

出法を用い、それぞれの職種の前年度の順位を加え数値の小さいものから順次1~16の順位を付したものである。各年度の偏差は総合順位と各年度の順位との差で、+符号は総合順位よりも上位であり-符号は下位であることを示している。(表13参照)。

まず獣医学科の35年度において総合順位より上位にある職種は、農協組合長・家畜診療所長・営農指導員・農協職員・農業改良普及員・会社課長である。38年度について同様の職種をみると、土木建築技師・営農指導員・栄養士・機械工業技術者・農業改良普及員・高校教諭となっている。これをみると両年度に共通の職種があることに気づくが、これは両年度の総合順位が平均値でなくてさらに順位化していることに起因するものであり職種間の相対的地位を問題としているからである。この両年度を比較すると35年度には農協組合長・家畜診療所長・会社課長の三つの管理職種があるが38年度には見あたらない。管理職種は表13の中には四職種であってその中三職種が35年度で高く評価され38年度には姿を消していることは注目に値するであろう。さらに35年度では会社課長という管理職を除いてすべて直接農業に関係する職種であるが、38年度においては農業関係職種は二つに減少し、土木建築技師・機械工業技術者・栄養士・高校教員など、各分野の専門技術を主とする職業が高く評価されていることも注目すべき現実である。

次に酪農学科についてみると、35年度において総合順位より上位のものは市役所課長・農協組合長・家畜診療所長・会社事務員・会社課長・中学校教諭である。38年度についてみると獣医師・農業試験場技師・土木建築技師・中学校教諭・農業改良普及員・会社課長・大学生である。35年度では六職種であるがその中に調査項目内の管理職種の全て四職種が含まれていることは、獣医学科についてみた際に指摘しておいたことと同様の現象である。農業職種が少ないことは獣医学科と傾向を異にしているといえるであろう。38年度では管理職種で会社課長が含まれまた大学生が含まれているが、大体は各分野の専門技術者であることは獣医学科とは同様の傾向をもつといえるであろう。

最後に35年度の栄養士課程と38年度の生活科学専攻であるが、この両者を同一に扱うことには疑点があるが学内においては同じ位置を占め両者とも女子のみで構成されているので、女子の傾向をみるためにここに掲げたのである。35年度では市役所課長・農協組合長・栄養士・機械工業技術者・高校教諭・会社課長が総合順位より高位に格付けされている。38年度では農業試験場技師・土木建築技師・中学校教諭・営農指導員・農協職員・農業改良普及員が上位に評価されている。35年度において前述の二学科同様管理職種が三つ含まれていることは35年度の特徴を示すものであろう。また農業に関係する職種は一つで、これは獣医学科とは異なりむしろ酪農学科に近いといえるであろう。学科名となっていた栄養士が35年度に存在して38年度では姿を消していることはこの学科の性格の変化を示すものであるかもしれない。またここにも土木建築技師が高く評価されており三学科に共通の職種である。さらに管理

職種が一つも見られず専門技術職種からなっていることも38年度の特色であろう。

以上三学科を通じていえることは、35年度では管理職種が比較的高く評価されているが、38年度ではほとんど各分野の専門技術職が高く評価されており、特に土木建築技師が三学科に共通に上位に評価されていることである。これは若い人の職業的階層判断が権力から専門技術の権威を尊重するようになってきているのかもしれない。換言すれば昔の極端な立身出世主義から専門技術職的サラリーマンへ転換しつつある片鱗を示すものであるかもしれない。いずれにせよ職業的階層判断は年度によって傾向を異にしていることは明らかである。昭和35年度と昭和38年度についていえば、この資料の示すところでは前者では管理職種が高く評価され、後者では各分野の専門職種が高く評価されているといえる。

## 6. 結 言

教育効果の向上の要素として学生の学習意欲の振起と持続が必要である。学習意欲の振起と持続の要因の一つとして人間の向上心があり、その現れは職業的階層判断にみられる。社会における職業全般については常識的で多数者共通の職業的判断の持主である人間も、自己の志望する学科に深い関係のある職種に関しては相対的に高位に評価する傾向が事実として存在することが調査の分析を通じて認められる。これは理論的には一定の職種を高位に評価する人間がその職種に入就する意欲をもって、その職種に関係の深い学科を選択し志望したものといえる。しかし学科には職業的階層判断の面からみて、獣医学科と酪農学科のようにそれほど差の大でない学科と、獣医学科と農業工学科などのように差があると認められる学科とがある。入学志望者が志望する学科を選択した心的過程において前述の意味があると認められるならば、その志望する学科以外の学科に配置された場合には学習意欲の振起と維持に困難性を感じ、学習意欲の減退あるいは不適応現象の因となるおそれがある。したがって入学者選抜においては第一志望を尊重することが教育的には望ましい。各般の事情から第二志望の活用を必要とする場合には、学科相互に職業的階層判断の面からあまり差の認められない学科間への転配は止むを得ないとしても、その差の認められる学科間の転配は可能なかぎり避けるのが賢明である。

なお職業的階層判断には年度による傾向の差の存在が検出された。それにとまって昭和35年度における入学者には全体的に管理職種を相対的に高位に格付けする傾向があり、昭和38年度入学者においては各分野にわたって専門的技術職種を相対的に高位に評価する傾向が認められたのである。

本稿資料の作成にあたって繁雑な計算と整理を担当してくださった神田瑞恵嬢ならびに平昌代嬢、および計算機について便宜を供与してくださった本学酪農経営学研究室に深謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 学生問題研究所：大学の入学試験に関する研究“学生問題研究所研究報告”第六冊(昭和37年9月).  
国立教育研究所：大学進学適性検査の妥当性の研究 学科試験との比較“国立教育研究所紀要”第七集.
- 2) Thorndike, E.: The psychology of wants, interests and attitudes (1935).
- 3, 4, 8) 学生問題研究所：高校の進路指導と大学生活“学生問題研究所研究報告”第二冊(昭和35年12月).
- 5) Thomas, R. M. and Soeparman: Occupational prestige, Indonesia and America. “The personnel and guidance” XLI, No. 5 (Jan., 1963).
- 6, 7) 尾高邦雄編：職業と階層(毎日ライブラリー). 毎日新聞社.(昭和33年).  
日本社会学会調査委員会：わが国における社会的移動“社会学評論”第25号(1956年).  
日本社会学会調査委員会：日本社会の階層的構造. 有斐閣.(1957年).  
尾高邦雄・西平重喜：わが国六大都市における社会的成層と移動“社会学評論”第12号(1953年).